刀　宇多真国

越中　天文

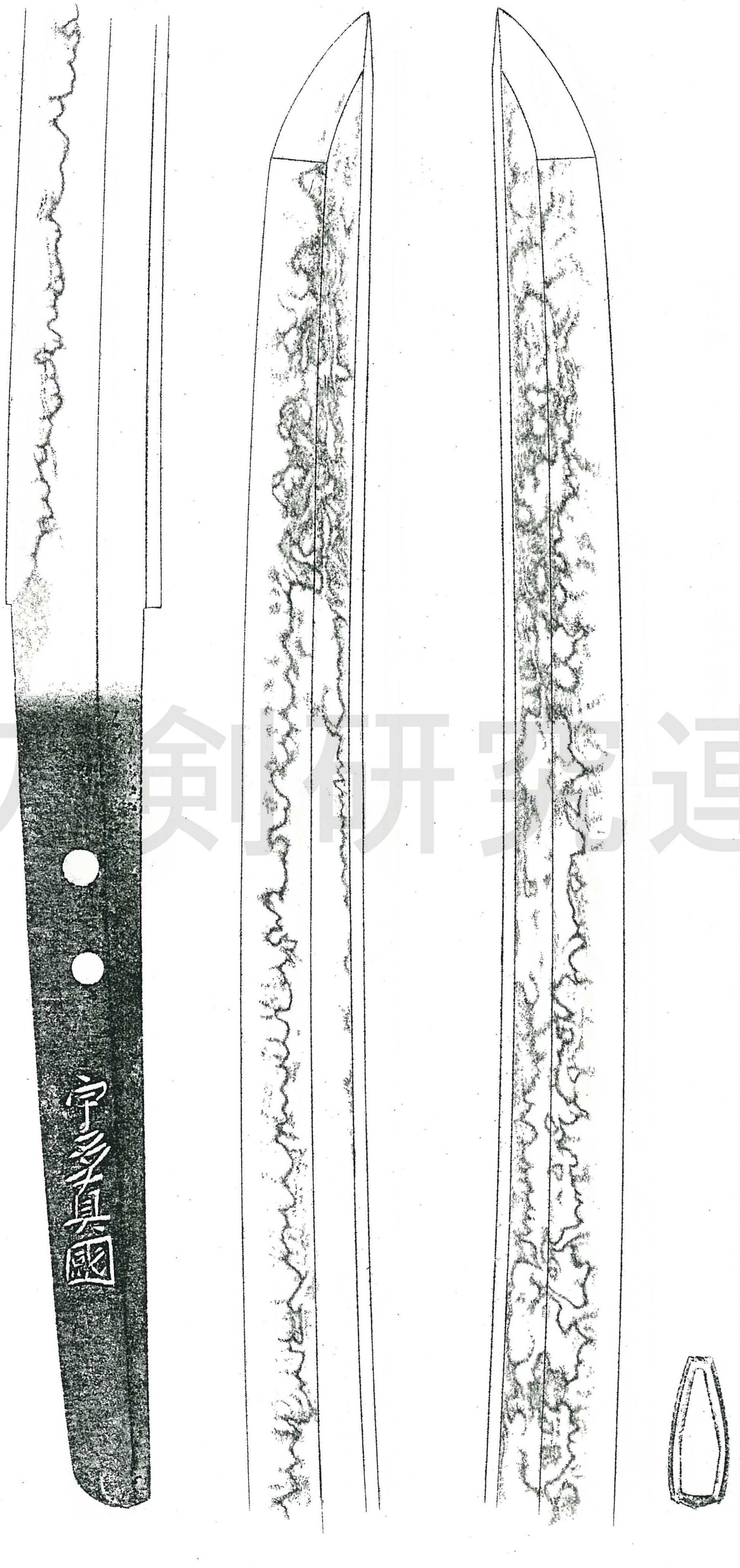
「宇多真国」

宇多。

藤左衛門。

法名　浄印。

宇多国真の子、または門人と伝える。



平成二十八年五月二十一日　　鑑定刀

刃長　75.0cm（二尺四寸七分五厘）　反り　2.20cm（七分三厘）　元巾　3.11cm（2.98cm）　先巾　2.08cm（1.97cm）　元重　1.80cm（1.59cm）

先重　0.47cm（0.37cm）　切先長　3.35cm　茎長　19.4cm（19.6cm）　茎反り　0.1cm

茎元巾　2.83cm　茎先巾　1.69　茎元重　1.82cm（1.69cm）　茎先重　1.47cm（1.44cm）

姿は鎬造、庵棟尋常、鎬巾は尋常で鎬の高い（菱形に近い）造込みとなり、切先は中切先でフクラは枯れる。反りはやや高めに先反りを加える。　地鉄は流れた板目に杢目を交じえてやや肌立ち、細かな地沸がつく。

刃文は互の目に丁字を交じえ、所々飛焼を焼く、物打辺りから横手にかけては棟を焼き皆焼となる。刃中　足・葉よく入り、細かな砂流しを交じえ、匂口は明るく冴えて所々沸がつく。　帽子は一枚。

茎は生ぶ、鎬巾は先にゆくにしたがって巾を狭め、区の近くの鎬は高く先の鎬高は尋常、先巾は広く刃上り栗尻、刃　角

棟　角小肉　　鑢は切り。目釘穴は二。銘は茎のやや下方の平地に四字銘を太鏨に切る。

本刀は室町末期、天文頃の作で宇多真国　傑出の一振りといえる。

刀剣研究連合会

太刀　重次（佩裏）

備中　文永
「重次」「重次作」
古青江。
盛次の子で為次の孫。
俊次の門人という。

平成二十八年五月二十一日　鑑定刀

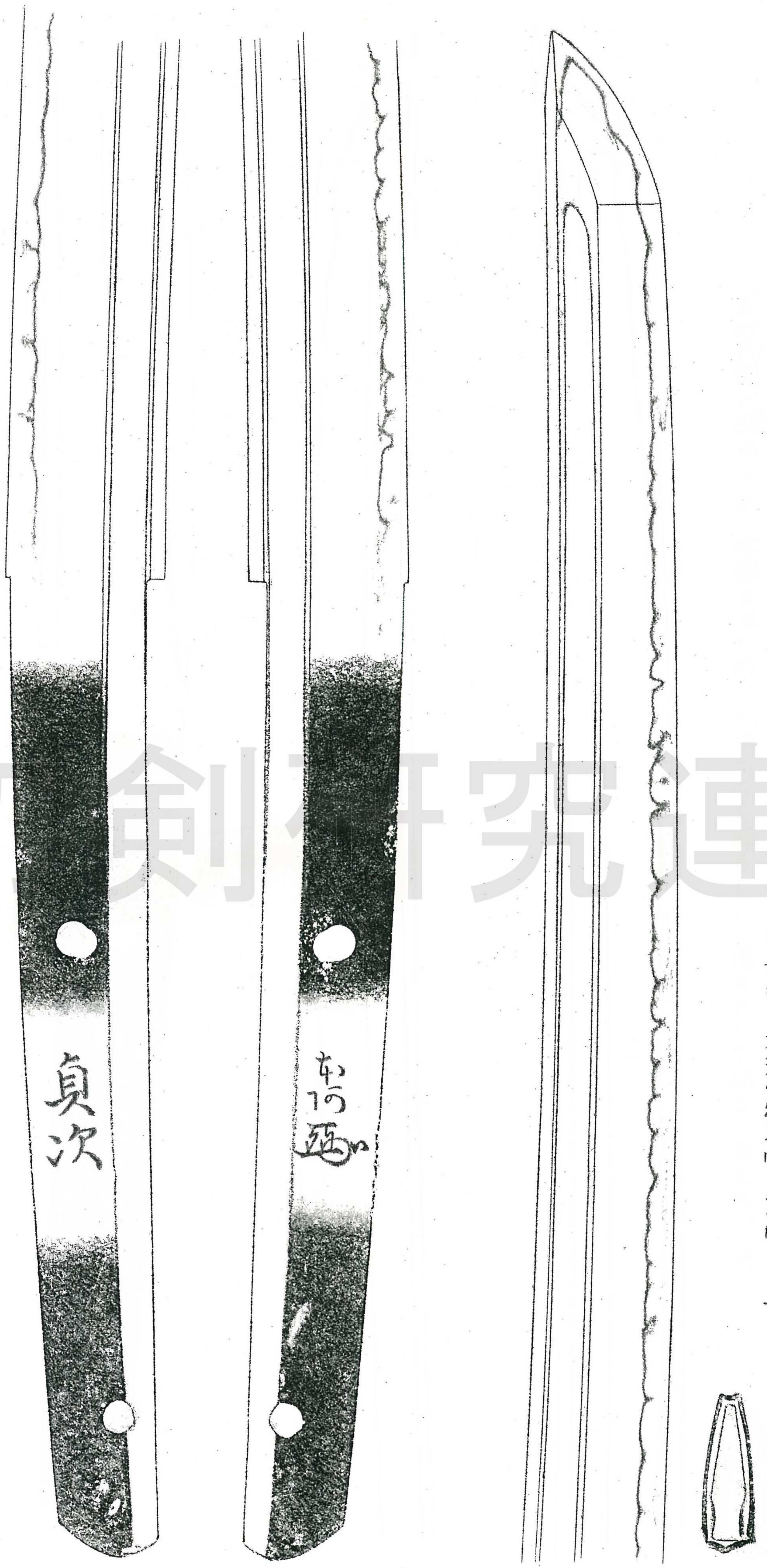
刃長 71.6cm（二尺三寸六分三厘）　反り 0.82cm（二分七厘）　元巾 2.89cm（2.79cm）　先巾 1.82cm（1.74cm）　元重 0.64cm（0.59cm）
先重 0.40cm（0.37cm）　切先長 3.16cm　茎長 19.5cm（19.7cm）　茎反り わずか
茎元巾 2.73cm　茎先巾 1.69cm　茎元重 0.68cm（0.64cm）　茎先重 0.47cm（0.42cm）

姿　鎬造、庵棟低く 鎬巾・鎬高は尋常、重ねと身巾も尋常な造込みとなり、元巾と先巾の差は開き中切先でフクラは尋常、反りは浅くやや踏張りがつく。　地鉄は板目に杢目 流れた肌が交じり、やや肌立ちながら微塵の地沸がつき、細かな地景が入り、地斑が交じり、乱れ映りが表われる。　刃文は直刃、浅く湾れて 小互の目・小丁字を交じえ、刃縁はほつれ、所々強く沸づき、刃中は足・葉よく入り、金筋・砂流し頻りにかかる。沸は深く明るく冴える。
帽子は直刃浅く湾れて先は焼つめ。　彫刻 表裏の元より茎の上部にかけて、鎬筋の上に腰樋を彫る。佩表は掻流し、裏は丸止め。　茎は磨上げ、鎬巾・鎬高は尋常、先は浅い栗尻、　刃角 　棟角 　鑢は大筋違、佩表の新鑢も大筋違。　目釘穴は二。銘は佩裏の茎先に太鏨大振りの二字銘を切る。

本太刀は地鉄と刃文に古青江の特色がよく示され、さらに刃文は古調でよく沸づき、足葉・金筋・砂流し等の働きを見せ、味わい深い作風を表わしている。

刀剣研究連合会

刀　金象嵌銘　貞次
　　本阿（花押）（琳雅）
備中　建武
「備中国青江住右衛門尉貞次作」
「備中国住大隅権介平貞次」
「備中国住青江大隅権介貞次作」
「備中国住大隅右衛門権介平貞次」
「備中国住右衛門佐貞次」
青江。　右衛門太郎。
助次の子。
大隅権介に任ぜられる。



平成二十八年五月二十一日　　鑑定刀

刃長　70.2cm（二尺三寸一分六厘）　反り　1.80cm（五分九厘）　元巾　3.08cm（2.97cm）　先巾　2.21cm（2.11cm）　元重　0.64cm（0.52cm）
先重　0.43cm（0.41cm）　切先長　3.58cm　茎長　19.9cm（20.3cm）　茎反り　わずか
茎元巾　2.80cm　茎先巾　2.08cm　茎元重　0.65cm（0.53cm）　茎先重　0.38cm（0.31cm）

姿は鎬造、庵棟、重ねは薄めで身巾は広めの造込みとなり、中切先がやや延びてフクラは枯れる。反りは中間反りが尋常。
地鉄は小板目に杢目を交じえて約み、細かに肌立ちながら微塵の地沸がついた所謂縮緬肌になり　地景が交じる。
刃文は中直刃、互の目・逆がかった刃・角張った刃、が交じり、足・葉が入り、匂口は締って小沸がつき明るく冴える。
帽子　浅く湾れて、先は小丸にやや深めに返る。　彫刻　表裏に両チリの樋先のやや下がった棒樋を掻き通す。
茎は大磨上げ、元巾と先巾の差は少なく先は刃上り栗尻、刃　角　棟　角　鑢は筋違い。目釘穴は二。銘は金象嵌で
差表に極銘、裏は琳雅の花押を施す。　地鉄と刃文及び帽子の様子と、大磨上げながらもその姿から鎌倉最末期から
南北朝初期のそれも建武頃の青江派の作とみられ、さらに地鉄・刃文の出来は　素晴らしい。

刀剣研究連合会

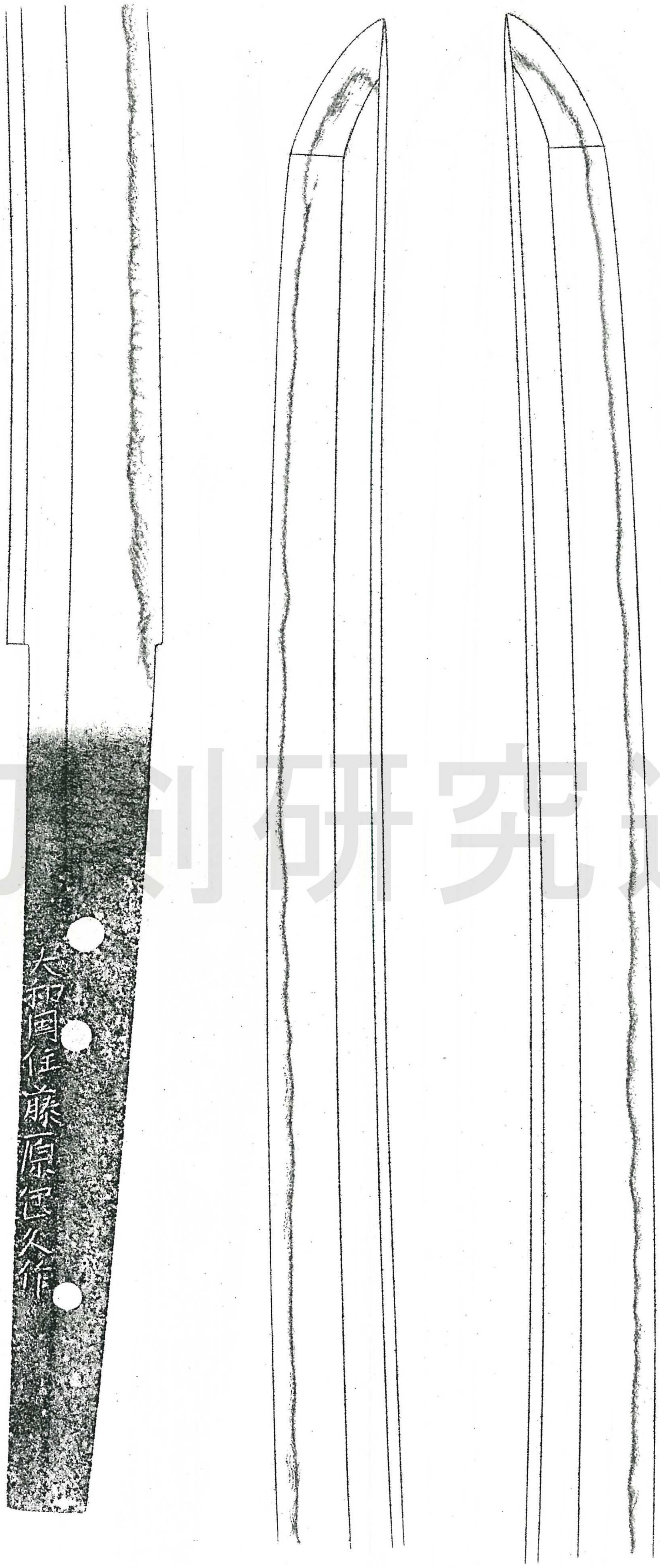
太刀　大和国住藤原包久作

大和　永享

「包久」「藤原包久」

手掻。

業物。



平成二十八年五月二十一日　鑑定刀

刃長 69.7cm（二尺三寸）　反り 1.88cm（六分二厘）　元巾 2.88cm（2.82cm）　先巾 1.87cm（1.77cm）　元重 0.67cm（0.63cm）

先重 0.38cm（0.33cm）　切先長 2.87cm　茎長 17.7cm（17.9cm）　茎反り わずか　茎元巾 2.64cm

茎先巾 1.74cm　茎元重 0.71cm（0.67cm）　茎先重 0.40cm（0.36cm）

姿　鎬造、庵棟高く、鎬巾・鎬高・重ね・身巾の尋常な造込みとなり、中切先でフクラは尋常、反りは中間反りが頃合い。

地鉄は板目に杢目　流れた肌が交じり、やや肌立ちかげんに地沸は厚く　細かな地景が入った、明るく冴えた見事な鉄。

刃文は直刃、浅く湾れて佩裏中程より上方に尖りかげんの互の目を一ツ焼く、刃縁は肌にからんで　ほつれや喰違いをみせ、刃中は足・葉入り、金筋・砂流しを交じえる。　帽子　直刃、先にゆくにしたがって焼巾を広め、佩表は焼つめで細かに掃け、裏の先は角張って返る。　匂口は小沸がよくつき明るく冴える。

棟　小丸　　鑢　佩表の旧鑢は鎬地の鑢目が判然としないため鷹羽か大筋違いであろう。裏は鷹羽。　茎は生ぶ、茎先は切に仕立て直している。　刃　角

目釘穴は三。銘は長銘を細鏨で鎬地に切る。　包久の作は文亀頃の作をみ受けるが、本刀は室町初期と鑑せられ、地鉄と刃文の出来映えは素晴らしく、晴々として明るく冴えている。

刀剣研究連合会

太刀　正恒

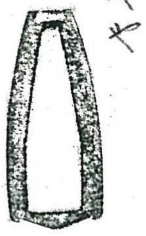
備中　　承元

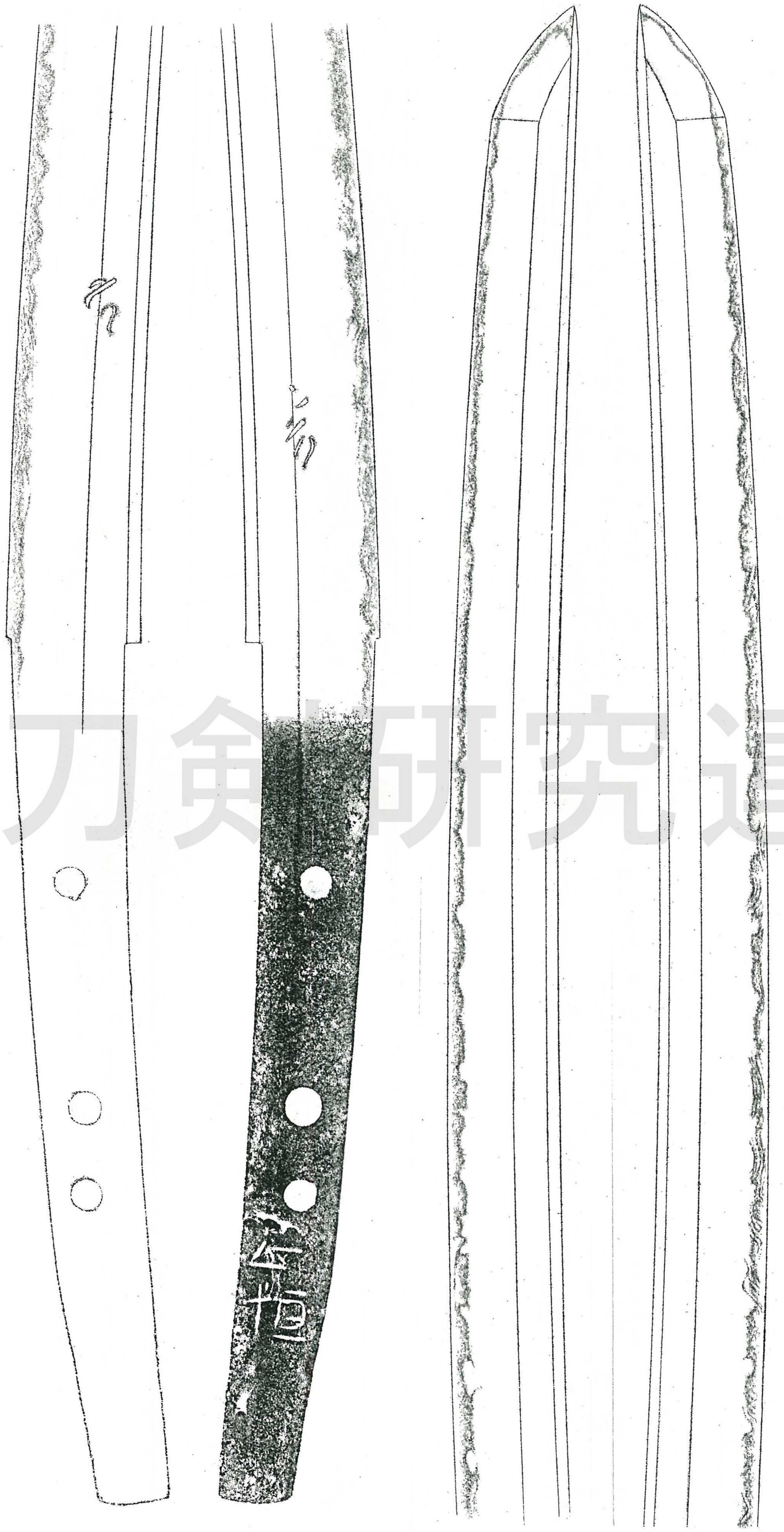
「正恒」
妹尾。
則高を祖とする鍛冶たちは
備前から妹尾庄に移住を
したため「妹尾鍛冶」と
呼ばれている。
正恒は則高の弟とも備前正包の
子とも伝えている。

平成二十八年五月二十一日　　鑑定刀

刃長 67.1cm（二尺二寸一分四厘）　反り 2.30cm（七分六厘）　元巾 2.65cm（2.54cm）　先巾 1.71cm（1.62cm）　元重 0.63cm（0.54cm）
先重 0.40cm（0.35cm）　切先長 2.60cm　茎長 18.3cm（18.5cm）　茎反り 0.2cm　茎元巾 2.42cm
茎先巾 1.62cm　茎元重 0.69cm（0.65cm）　茎先重 0.55cm（0.48cm）

姿は鎬造、庵棟、身巾の狭い造込みとなり、小切先でフクラは枯れる。腰反り高く先で伏しごころがある。
地鉄は板目に杢目、やや肌立ちかげんに約み、微塵の地沸が厚くつき　細かな地景が交じる。　刃文は直刃に小乱れ・小丁字小互の目・やや角張った互の目を交じえ、肌にからんで細かな金筋・砂流しかかり、刃中は足・葉・金筋・砂流しが入る。匂口は所々うるんで小沸がつき　明るい。
帽子は直刃、浅く湾れて先は小丸でやや掃け　短かく返る。　彫刻　表裏の腰元に梵字。
茎は磨上げ、雉子股になり　先は浅い刃上り栗尻、刃 角小丸 ∩ 棟 角小肉 ⌈ 鑢は勝手下り、裏の新鑢は大筋違い。
目釘穴は三。銘は茎の下方　大振りに二字銘を切る。　地鉄は板目に杢目を交じえて細かにやや
肌立った所謂縮緬肌で、刃文は直刃調沸・匂が深くうるみかげんとなる。渋く味わいが豊か。





刀剣研究連合会